

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (学 術)	氏名	張 雪梅
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目 日本語と延辺朝鮮語における依頼談話の展開について—談話構造とストラテジーの考察を中心に—			
論文審査担当者 主 査 深見兼孝 (大学院国際協力研究科・准教授) 審査委員 黒田則博 (大学院国際協力研究科・教授) 審査委員 佐藤暢治 (大学院国際協力研究科・教授) 審査委員 今田良信 (大学院文学研究科・教授) 審査委員 高永茂 (大学院文学研究科・教授)			
〔論文審査の要旨〕 本論文は、従来の依頼談話の研究が、談話の展開の分析にまで及んでいないことを背景に、日本語と延辺朝鮮語の依頼談話が、どのような構造を持ち、どのようなストラテジーを持った発話が連鎖していくかを、対照言語学の立場から分析したものである。 論文は8章からなる。まず、第1章で研究の目的が依頼談話の話段レベル、ストラテジーレベルでの構造と展開の解明にあるとしている。第2章で先行研究の検討を行い、研究課題の解明の必要性を説くとともに、諸概念の定義、研究の方法等を提示している。第3章で調査の概要を示し、第4章で研究の枠組みとして、話段およびストラテジーの分類を行い、「本用件部」と「再依頼部」に分けて分析を進めていくとしている。第5章で話段から見た依頼談話の全体的構造を分析し、主流をなす構造は両語に共通しているとしている。第6章で「本用件部」の分析を行っている。その結果、延辺朝鮮語の方が日本語より依頼を承諾しやすい、全体として使用されるストラテジーは日本語の方が多いが、1回のターンに使用するストラテジーは延辺朝鮮語の方が多い、拒絶の場合、延辺朝鮮語では「非難」が用いられることがあるのに対し、日本語ではそれが見られないことなどを明らかにしている。第7章で「再依頼部」を分析している。その結果、延辺朝鮮語では「本用件部」での拒絶が「再依頼部」のはじめに日本語ほど影響していないが、全体的にはストラテジーの数が増える、被依頼者が依頼に対して曖昧な反応を示したあとに積極的な姿勢に変わる場合、日本語では依頼者は承諾を確実なものにしようとする傾向があるのに対し、延辺朝鮮語では承諾されたものとして発話を続けない傾向がある、被依頼者が拒絶をしたい場合は、日本語は相手に徐々に拒絶を予測させようとする傾向があることなどを明らかにしている。第8章はまとめと今後の課題を述べている。 本研究は、依頼談話の中心をなす「本用件部」と「再依頼部」において、ストラテジーの観点から、その種類や使用頻度だけでなく、それぞれにおいて始めから終わりまで依頼側と被依頼側の発話がどのように連鎖していくかを詳細に分析している。この点が、依頼側に偏っていたり、ストラテジーの種類とその使用頻度、あるいは一部の連鎖のみが扱われていた従来の研究にない、本研究の独創的な点だと評価できる。本論文に関して、査読付き論文1本を含む2本の論文が公刊されており、審査委員会は全員一致で、本論文の著者が博士(学術)の学位を授与される十分な資格があると判断した。			